

木村 健一郎 (KIMURA Kenichiro)

上級研究員 博士 (林学)
2009年 国際農林水産業研究センター
農村開発領域
2023年 農研機構 農村工学研究部門
資源利用研究領域
地域資源利用・管理グループ 配属



研究者の横顔

<これまでの研究の概要>

はじめまして。木村健一郎と申します。これまで15年間、後発開発途上国の里地里山を中心に農村開発の研究に携わってきました。森林研究を専門とすることから、木材や非木材林産物と呼ばれる森林から産出されるキノコや山菜、木炭など様々な産物を使って農山村の人々の生活が豊かになるような研究にこれまで取り組んできました。農村開発は農林水産様々な分野の研究者が参加する機会が多く、学際的な総合プロジェクトが多いです。多くは農業土木の研究者が中心となり、各分野が参画します。最も長く携わった東南アジアのラオスでは、焼畑や薪採取で水源林が荒廃し、そのため水田への水供給量が不十分となって米生産量が低いと考えられていました。そこで水田上流の水源林を保全するため森林の経済価値を明らかにし、過度な森林伐採は山菜等が採れなくなることを説明して村人に森林保全の動機付けを行いました。また、実は薪の利用は持続的であり、焼畑も当初のゾーニングに問題があることが明らかになりました。そこで土地森林利用の政策変更を提言するなどといった仕事をしておりました。



ラオス一般家庭の薪利用量調査

当時のラオスは統計や村の地図など基盤情報が未整備なものが多く、基礎的なデータも自分たちで取得することが多かったです。村の世帯調査をすると、民族によっては一夫多妻（ラオスは一妻一夫）で同じ家に奥さんが二人のケース、奥さん毎に家があるケース、おまけにラオスに住みながらラオス語を話さない人（モン語のみ）もいたりなど、世帯調査も一苦労でした。

こんな背景もあり、日本の農村調査など一度勉強してみたいと思い農工研に異動希望し、今回異動になりました。これまで扱ったことがないエネルギーがテーマですが、何卒よろしくお願い申し上げます。

<最近>
マラソンや自転車、トライアスロン、トレランとやっていたはずですが、コロナ禍ですっかり運動習慣がなくなり、たいへん太ってしまいました。あの頃の身体と体力をとり戻そうと、今年からちょこちょこ運動を始めていますが、一向に痩せません。百里の道も一歩からと、今はほぼ毎週末、筑波山や周辺の低山を登っています。



写真の大きな木（カボック）は、木の実から綿が、種からは油が取れます。こういうのを資源開発、農村開発につかえないかと日頃から考えています。